

生きる力を身につける 生き方に気付く Y M C A キャンプ

青山 鉄平

Aoyama Teppei

文教大学人間科学部専任講師
国立青少年教育振興機構客員研究員
前東京YMCA 野尻学荘プログラムディレクター



▼ YMCAとの出会い

父親が少年時代から、メンバー（参加者）やリーダーとしてYMCAに関わりを持っていたこともあり、YMCAという名前には小さい頃から馴染みがありました。初めてYMCAのプログラムに参加したのは小学校1年生のときですから、自分の意思で関わりをもったというよりは、気づいたら参加していたという感じです。

大学生になった時、「野尻学荘のリーダーをやってみないか」と声をかけてもらいました。最初はまさか自分がこのキャンプに長く関わることになるとは思っていませんでしたが、徐々に活動が広がり、役割が変わっていく中で、自分にとっての大切なライフワークになっていきました。リーダーとして関わり始めたころ、父のことを知っている人に会うことも多く、YMCAを通じた人のつながりの不思議さや面白さを感じたものです。

以前は私が父の息子として紹介されることが多かったのですが、最近では、父が私の父として紹介されることが多いようで、立場が逆転したりもしています。

▼苦勞した初めてのグループリーダー

リーダー 2 年目に、初めてグループリーダーとなり、中学 2 年生を担当することになりました。2 週間にわたる共同生活の中では、やりたいことが違えば意見もぶつかりますし、お互いを尊重したり、説得したり、譲りあったりしなくてはならない場面が多くあります。否応なくお互いの「地」が出てきますし、ストレスや葛藤を感じる場面も少なくありません。

それはリーダーの私にとっても例外ではなく、「グループの一員」として、自分が問われる場面がたくさん生じます。濃密な人間関係の中でこうした経験は、私にとって楽しいものであると同時に実に苦しいものでもありました。この「苦しさ」も含めて成長の糧にしていけることが長期キャンプの強みでもあると思いますが、経験の浅い新米リーダーの私にそんなことを考える余裕があるはずもなく、メンバーと関わることに毎日必死だったのをよく覚えています。

あとから振り返ると、あの時の「苦しさ」があったからこそ、翌年以降も続けて参加したように思いますし、「リーダーに求められる役割」や「組織キャンプの存在意義」などを深く考えるきっかけにもなったような気がします。それはメンバーとしての参加経験もなく、アウトドアスキルも全くなかった私にとって、単なる「野外活動」とは異なる組織キャンプの教育的な一面を強く意識するようになった経験でもありました。



野尻学荘は、小学 5 年から高校 3 年までの男子を対象に、長野県野尻湖畔にある東京 Y M C A 野尻キャンプ場で開催される。2 週間寝食を共に過ごす。

▼100年、世代を超えて試行錯誤を繰り返す

初めて野尻学荘でリーダーを経験してから16年、現在もYMCAとの関わりを続けながら、大学で社会教育・青少年教育を教えています。現在の専門分野は、まさにキャンプを通じて得た問題意識を出発点にしたものです。

組織キャンプの教育的な意義を考えると、さまざまなスキルの習得といったこと以上に、「生き方」そのものを学ぶ、といった要素が重要だと思います。一人ひとりの子どもたちが、さまざまな「生き方」に出会い、新たな「生き方」にチャレンジできること。さらにキャンプそのものが時代や社会の変化の中で、新たな「生き方」を探る実験場として存在していること。近年、教育効果を可視化したり、指導法を「マニュアル化」「パッケージ化」しようという傾向が強まる青少年の体験活動の分野においては、曖昧すぎる言い方かもしれません。

しかし、「生き方」をめぐる曖昧な価値を追い続けて試行錯誤することこそ、YMCAキャンプが100年間大切にしてきたことだと思いますし、これからの100年も大切にしてほしいことだと思っています。

Profile

1980年 東京生まれ。
文教大学人間科学部専任講師。
文部科学省生涯学習政策局生涯学習調査官
国立青少年教育振興機構客員研究員
埼玉県社会教育委員などを兼務。

専門は社会教育・生涯学習論。
前東京YMCA野尻学荘プログラムディレクター。



【取材:東京YMCA 小野実】



野尻学荘は1932（昭和7）年に開始され、青少年のための長期の組織キャンプとしては、日本で最も伝統のあるキャンプです。これまでの延べ参加者数は約6,000名にのぼり、野尻学荘で成長した多くの卒業生が社会の様々な分野で活躍しています。